付

藤原純友と日振島

坂本賞三
下向井龍彦
佐竹昭

国史学の古代担当三名は、十世紀前期の藤原純友の乱をとりあげて研究を行った。純友の乱は、瀬戸内海沿岸一帯を中心とし、博多ー大宰府、日向、また乱の一味の逃亡を追って但馬にまで及んだのだが、本研究課題からみて好適な研究対象となるものである。

純友の乱は東国における平将門の乱と時を同じくして生じた反乱で、東西から挟撃される形となった中央政府を恐怖させた。平将門の乱については研究が進んでいるのにくらべて、純友の乱に関する研究は非常に立ち遅れているといわざるをえない現状である。我々は次のように研究を進めた。

㈠　純友の乱を文献史料によって解明する研究を深化させること。この面からの研究を進めた下向井龍彦は、(A)「『藤原純友の乱』再検討のための一史料」（『日本歴史』四九五号　平成元年八月）、(B)本誌所収「部内居住衛府舎人問題と承平南海賊」を発表し、さらに純友の乱に関する次の論文(C)「天慶二年藤原純友の乱についての政治史的考察」を準備中である。

㈡　『日本紀略』承平六年六月某日条に記されている記事から藤原純友の根拠地とされている愛媛県宇和島市日振島の実地調査を行い、従来その存在もほとんど知られず、過去にごく僅かな研究者が利用しただけであった『日振島村誌』稿（明治四十四年現在で記述されている）を翻刻した（『内海文化研究紀要』一六号　昭和六十三年十月）。

㈠の下向井論文(A)で論じたように、今まで藤原純友が承平年間に日振島を根拠としていた海賊首であったとして疑わなかったのは、『日本紀略』承平六年六月某日条の「南海賊徒首藤原純友結レ党、屯二聚伊予国日振島一、設二千余艘一、抄二劫官物私財一」という文言にあったのだが、この部分の文言は後の述作で、承平六年に平定された海賊蜂起とは矛盾するものである。ただしこの部分の文言が、いつごろどのようにして『日本紀略』に付加されたのかは分らない。下向井論文(B)(C)によれば、藤原純友は承平年間の諸国の衛府舎人の集団蜂起を鎮圧した勲功者の一人であったが、国家は彼ら功労者たちに恩賞を与えなかった。天慶二年備前国で勲功者の一人藤原文元と備前介藤原子高との間で紛争が生じた。文元から救援要請をうけた純友は承平海賊平定の恩賞を要求して挙兵し、ついに乱となった。この純友の乱が海上勢力と全く無縁だというのではないが、少くとも従来強調されてきたように海上輸送に従事していた人々が主体となった反乱という見方は、再検討しなければならない。

次に㈡について、明治末期の『日振島村誌』の記述と同島実地調査によれば、同島は、宇和郡と主たる関係をもつのは当然として、宇和郡以外では対岸の九州との関係がみられるのであって、佐田岬を廻った瀬戸内海地方との関係はほとんど見出されない。

『日振島村誌』にみられる対岸九州地方との関係を示す記事は次のようなものがある。出稼の項で、宇和島・吉田・八幡浜方面への出稼を記したあと「尚之ニ止マラス、或ハ船員トナリ、工夫トナリ、若クハ日向地方ヘ至リ農業ヲナスモノアリテ」とあり、商業の項で「直接宇和島・八幡浜・今治若クハ大分県ヘ販路ヲ通シ」とあり、交通の項で「一、航路　宇和島トノ交通ハ頻繁ナリ、其他岩松・佐伯・宮崎等ノ地方ヘ往復スルコトアレトモ甚タ稀ナリ」とある。

また戦国時代に豊後の大友氏が宇和郡に侵攻する際に日振島が利用されている。土居清良の『清良記』によれば、天文十五年（一五四六）に大友氏が日振島に渡り、そこから宇和郡海辺各地を襲ったといい、また永禄三年（一五六〇）に大友氏が百余艘の船で日振島に来襲し、そこから宇和郡各地を攻撃したという。元亀三年（一五七二）に大友氏が伊予に軍を進めて西園寺氏を攻撃した経過が『愛媛県史　古代Ⅱ・中世』に記されているが、この際にも日振島が攻撃の拠点とされたであろうと思われる。

一方、日振島から瀬戸内海へ出るためには佐田岬を廻らなければならなかった。天正四年（一五七六）に西園寺宣久が宇和島から伊勢参宮に往復した道中を記した「伊勢参宮海陸の記」（『宇和旧記』所収、本史料については篠崎光男氏から御教示を得た）によれば、（往路の記事は鞆まで欠けていて不明だが）復路では芸予叢島から興居島を過ぎ、出水に着き、そこから陸路で松葉黒瀬を経て丸串に帰着している。

また広島大学教育学部青野春水教授からの御教示により、『宇和旧記』（萩森殿之事　三机浦）や「清良記當時聞書追攷」（入交好脩編著『清良記―親民鑑月集』第三部附録）に塩成（しおなし）掘切の記事があることを知った。それによれば、慶長十三年（一六〇八）から同十八年までこの地を領知した富田信濃守信高は、佐田岬を廻る不便を回避するため、塩成から三机（みつくえ）まで切り抜いて船を通そうと工事を開始したが、まだ完成しないうちに富田信濃守が改易となり、この計画はついに完成しなかった。現在それが凹地となって跡を残す。なお蔦優「宇和島藩の参勤交代」㈠（宇和島東高校『研究紀要』一四号　一九八八年三月）によれば、宇和島藩参勤交代の経路は宇和島―大坂間の海上部分をどのように通行するかで大きく四通りに区分される。第一期（寛文二年から元禄十年を中心とする時期）には宇和島から塩成まで海路、塩成―三机間は陸路、三机から大坂まで海路であり、第二期（元禄十一年から明和七年まで）には宇和島―塩成間を海路、塩成―三机間を陸路としたり、宇和島―三机間を陸路とするが、中には宇和島―三机間を海路としたものもあり、三机―室津を海路とする。第三期（享保十三年から安永六年）には宇和島から波止浜まで陸路、波止浜から尾道まで海路とする。第四期（文政九年から幕末まで）には宇和島から室津まで海路とする。こうしてみると江戸時代においても十八世紀後期ごろまでは宇和島藩参勤交代で佐田岬を廻ることをほとんど回避しているのであった。

このようにみてくると、日振島から瀬戸内海の海上交通を制しようとすれば地理的に不便であり、地理的にみれば同島は宇和郡の陸地から島づたいの先端に位置したことが第一義だったのではなかろうかと推測される。ただし、この地理的条件が藤原純友の根拠地としてどの

ような意味をもったのかは、いま直ちに結論を出すことはできない。が、純友の乱における藤原純友の性格が見直されつつある現在、日振島の地理的条件も考慮にいれる必要があると考えられるのである。